

十一月二十一日 日曜日

八時三十五分世田谷村発、車で家内と富士嶺観音堂へ向う。中川幸美さんの御母堂が亡くなられ、そのおくやみを申し上げるのが目的。昨夜はユリイカの藤森特集をゆつくり再読した。二度読むと理解が深まる。藤森は再びじっくり考えてみる必要がある。途中鳴沢のレストエリアで休み、少しの買い物をして十一時観音堂着。中央高速を走っていた時には良く見えていた富士山は暗い雲の中に隠れてしまった。観音堂建設前には良く見えていたのだが……。

「富士嶺観音堂」

例えば、バルセロナの冬の日曜日、ランブラス通りから横丁に入ったサンタマリア・デルピ教会（十五世紀）にまぎれ込んだとする。観音信仰に似たマリア信仰とは言え、小聖堂の内部は森閑として、しわぶき一つ聴こえない。人々は暗闇に差し込むステインド・グラスの色光や、淡い自然光の中で祈り、黙考する。ここ富士嶺の観音堂では、わざわざ富士山まで日曜日とは言え足を運んだ人々は、私も含めてカレーライスを喰べ、コーヒーを飲み、明るい住宅みたいな光の中で談笑し、世間話しに花を咲かせる。時々、マリアならぬ観音像に手を合わせる人は出現するが、森閑とした孤独の中で祈る人はほとんど居ない。

この観音堂を建てたのは中川幸美さんを中心とした、何百人かの集団である。新興宗教とは異なるが、中川幸美さん個人の異能

振りに魅かれ、その力を求心力にして集合した集団である。この集団は小さい飛躍を許していただければ、ある意味では宗教的集団の始まりの原型のようなものだ。ここ十数年この集団とお付き合いしているが、私はこの集まりの場所に多くの人間の死の現場に立ち合った経験が無い。死を逃れられぬ宿命に直面した人や、その家族が中川さんの異能振りを頼りに訪れるからだ。時に奇跡的に生を得た人も居るようだが、生老病死からの自由はあり得ぬから、必然的に私はこの集まりの中で多くの人間の死を眺めてきた。そして極く極く自然に日常の中に死を見る姿勢を身につけつつあるように思う。

観音堂の内の、一向に森閑としない日常性の本体は何だろうか。ここまでやって来る人は勿論物見遊山が目的ではない。大方の人が心の内に深い不安と、絶望に近いものを宿しているに違いない。不治の病と対面している人も少なくない筈だ。家族の何某が、飛んでもない境遇にある人もいるだろう。キリスト教の完成された教義と、その儀式的器としてのカテドラル。儀礼、儀式以外の祈りの形は、あくまでも個人対神である。それ故、そこには森閑とした孤独な空間が出現する。

十四時三〇分中川幸美さんに御母堂のお悔やみを申し上げて、まだざわめきの残る観音堂を去る。原口夫妻同乗。原口家の九〇才になる老婆の話し等聞くうちにアットいままに東京着。世田谷村十六時三〇分帰着。

観音堂に寄り集る人間達のそれぞれの境遇を全て知る由も無いが、個々人が対面している問題は深刻であろう。癌になったり、白内障になったり、子供が重度の知恵遅れであったり、医者から

アト数ヶ月の命を宣告されたりの人が多い筈だ。それでなければここには来ない。重度障害者の子供を連れて死のうと決心した事のある、今は表向きはとも明るいKさんは今日は姿が視えぬ。が、その深刻な状況の筈なのに、この観音堂内の空気の明るい平坦な日常性、つまり無限の繰り返し性のようなものは何なのだろうか。世間話の充満の中に深い不安や絶望が解消されるわけもない。そんな事は当たり前だ。それでは、この人達は対面している問題にキチンと対峙しようと思わずに、安易な逃げを打ち続けているのであろうか。ようするに、この人達はイヤシ、なくさめ合い、の空気を求めてここに参集しているのだろうか。そうではあるまい。

危機に落ち入った時に人間はその本性を赤裸裸にせざるを得ない。抽象的な思索、イデオロギー、思想らしきなんてものは当然吹き飛んでしまう。アナタ、ガンですよと、アト一年の命だぜと宣告された人間が、それでも抽象的な思考を続けるとは考えられぬ。今でも尊敬して止まぬ故佐藤健だつて、キチンとそうだった。身近な死と対面した時に人間は全て抽象的思考を捨て去る。「アト、何ヶ月生きられるか」「旅に出ても良いのか」「メシを思う存分喰べても良いか」の恐ろしい位の生物的即物性の只中に生きざるを得ないのだ。それでは、その様な方向性で考えるならば、観音堂内の明るい、繰り返し性の日常は全く肯定されてしかるべきモノなのか。つまり、アブストラクトな価値観は人間の生死の問題とは余りにも距離があり過ぎるといふ、小学生でも理解できる社会学の前に、一切の抽象性は捨象されて然るべきなのだろうか。

十一月二十二日

昨夜は、長い時間眠った。観音堂に行った後は必ず眠る。身体、精神共に科学で説明できぬ事が多くある。

七時過起床。今日も良い天気だ。良いアイデアが生まれると良いのだが、これも又運を天に任せるしかない。アト一つ、アイデアが必要だ。それが生まれれば攻撃に転じる事が出来る。十時研究室セミ。低調である。この人材の軽さに合わせた方法を私が発見できないのが原因なのか、ただただ素材が悪いのか。マア、私としては忘然とするしかない。十四時新潮社インタビュー。永江郎君と久し振りに会う。永江君も今や、マルチライターで活躍中である。建築住宅系のジャーナリストで言えば植田実、中原洋さん等の、おいしい生活系だな。身の丈にあつた生活派だ。しかしながら、良く生きて、なんとか良く喰べているところが、えらいのだ。若いのに自分の家まで建ててしまつて。生活上手なんだな。十七時新大久保駅前の近江家でビール飲んでいたら、清水建設の大山君にパツタリ会つた。彼とは建築観、世界観共にまるで違ふところ迄離れてしまつた。十九時世田谷村に戻る。

十一月二十三日

深夜三時半目覚めてしまい。起きて色々考えている。富士嶺観音堂は今のところGAにしか発表してないが、もつと広いメディアに出す事を考えた方が良くも知れない。アレは建築はともかく、あの場所の意味の方がズーツと面白い筈のものだ。四時過眠くなつたので、再び眠る。